

「奥行き感覚」のアーカイブ

2018年度活動報告

古今東西、歴史に残る美術作品の表現には、絵画や彫刻を問わず造形原理としての「奥行き」が存在し、鑑賞者は実作品を目の前にすると、視覚を超えて身体感覚でそのすばらしさを感じる。なぜ実感するのか、その「感覚」を、作品の文脈ではなく実制作を通して探究し、「奥行き感覚」をキーワードに共通感覚として読み解こうとするのが本研究の目的である。本研究は、2012年度に美術学部のテーマ演習として始まり、2013年度以降「奥行き感覚」と名前を変え、授業を研究のベースとして継続している。2016年度には研究グループを組織して科学研究費を獲得し、本年度は3年目となる。

2017年度後期のテーマ演習では、絵画と彫刻の接点を追求したマチスの晩年の切り絵作品《ブルーノード》を課題にしたが、2018年度前期も引き続き色紙のカットアウトによる制作を行い、その独特な奥行き感覚を持った空間性の仕組みについて検証した。マチス作品は、その的確に簡略化し切り取られたフォルムから人体の厚みや重さすら感じさせ、空間をはらんだ形として平面から空間へと出入りする。昨年度は青だけ使用したが、今期はまず色に焦点を当て、個々に決めた様々な色紙を作成し、モデルをデッサンした後にそのフォルムをはさみで切り出す課題から始めた。その後、カットアウトの技法とモチーフとの結びつきを検証するために、それぞれが古今東西の美術作品を自由に選択する課題を設定した。ラオコーン像、ロダン、マリノ・マリニ、プーデルといった彫刻、縄文土器、エゴン・シーレや俵屋宗達の絵画、またその他に風景やゾウや石庭といった実景をモチーフとして選んで実制作を行い、そこに立ち現れる空間性について議論した。

2018年度後期のテーマ演習では、研究対象として懸案であった「風景画」をテーマとし、西洋風景画と東洋風景画の中にある多様な奥行き表現を検証した。「プーシキン美術館展―旅するフランス風景画」(国立国際美術館)の見学から始まり、風景画を風景画たらしめている要素を議論した後、実際に風景をスケッチする課題を行った。また、大阪市立美術館で開催された中国絵画の特集展示「阿部房次郎と中国書画」の見学を行い、東西の風景画の違いの理解を深めた。

2018年11月には、研究グループで台北・国立故宮博物院の中国絵画の実見調査を実施した。「国宝再現―書画菁華特展」は台湾において国宝に指定された故宮所蔵の書画を選びすぐって陳列するものであったが、中国絵画の代表的ジャンルである人物、山水、花鳥の各画題における奥行きや立体感の表現方法と視覚効果を体験できたのは大きな収穫であった。また、テーマ演習では、日本画専攻の浅野均教授の特別講義や、小林ちよの氏(博士課程日本画研究領域)のレクチャーも行われた。中国山水画独特の、移行する複数の視点や余白や中身などについて議論した後、各自が撮影した写真をもとに山水画の仕組みをふまえた風景画を制作する課題を行い、その結果を検証した。

以上の前期テーマ演習と台湾研修については、詳細を美術学部研究紀要第63号に掲載しているので参照されたい。

重松 あゆみ(美術学部教授)